

附属特別支援学校の中学部生徒を対象にした包括的性教育の試み ～指導内容や指導形態をさぐる～

研究代表者：和歌山大学教育学部 林 修

共同研究者：辻本佐和美 西本一史 児玉亜矢 山路公美子 入學遼治
谷 重男 三木理恵子 猿棒 亜矢

1. はじめに

本校中学部では、月1回程度保健体育の授業の中で、体の各部の動きや病気やけがの対応などを内容とする保健学習を行ってきた。また、平成24年度からは、学期に1回程度の時間を特設し、男女別や発達段階別のグループにて「体の学習」（性教育）を行ってきた。さらに、令和元年度からは、異性の体の変化や考え方の違いに気づくとともに、お互いのことを尊重し、思いやる気持ちにつなげていくことを大切にしたいと考え、男女共習での2つのグループに分けた指導形態を追加し、実践を行った。こうした取り組みの中で、生徒の実態に即した指導内容や指導形態のあり方を実践的に研究しているところである。

本稿では、中学部から本校に入学した生徒の男女共習グループ（以下、体の学習1グループとする）についての報告を行う。

2. 単元を設定するにあたっての包括的性教育の考え方

本校の子どもたちは、発達段階や障害特性等の違いから、友人関係の中で性に関する知識や対応の仕方等を自然に学び取っていくということは難しく、目の前にある情報がすべてだと捉えてしまうような実態がある。それだけに、「性」についても正しい知識を理解し、考え、学んでいく機会が求められる。そのためには、まず教師側が正しく「性」を捉え、子どもたちに何をどのように教えるのかを整理する必要がある。現在中学部では、本校の全体研究で昨年度作成したセクシュアリティ教育和附特モデル（図1）を使用し、個人の

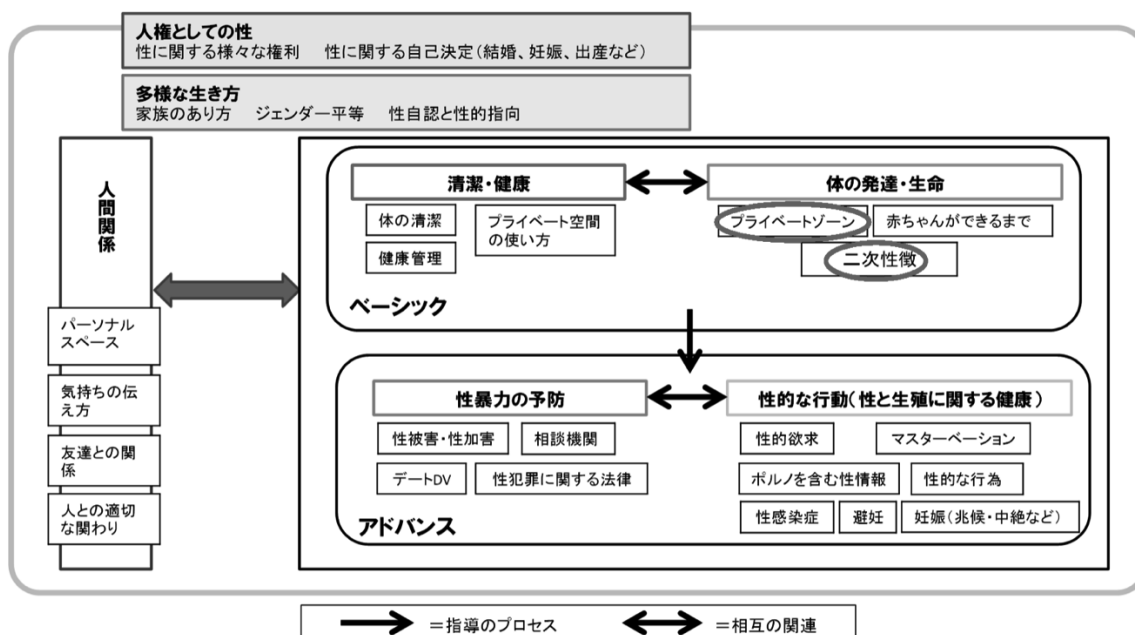


図1 仮説したセクシュアリティ教育の和附特モデル

特性に応じてそれぞれの学習内容を確かに学ぶことができるような授業づくりを研究しているところである。

この和附特モデルの特徴は、『人権としての性』『多様な生き方』をベースとおさえたいうえで、『清潔・健康』『体の発達・生命』〈ベーシック〉、『性暴力の予防』『性的な行動（性と生殖に関する健康）』〈アドバンス〉、及び、これらと関わる『人間関係』について学ぶことを大切にしているところである。こうした考え方に基づき、今回は、『体の発達・生命』において、中学部の生徒が「二次性徴」を自分自身のこととして捉え、自分らしく理解していけるように単元を設定し、実践したのでその成果を報告する。

3. 包括的性教育としての実践をめざして

①指導内容の仮説

体の学習1グループは、全員が地域の小学校を卒業して中学部から入学してきた生徒で構成されている。そのため、「性」に関しての既習事項にはばらつきがみられ、比較的多くの事柄を学習してきた生徒から「性」に関する内容にほとんど触れたことのない生徒までいる。こうした現状から、彼らが二次性徴を迎え、子どもから大人へ体に変化している一方で、体の変化に心の成長が追いついていなかったり、授業の中で体の変化について学んでも自分自身のこととして結び付けられていなかったりする実態が見られる。また、異性の体の変化についてほとんど知らない生徒や反対に異性に興味を持ち始め、インターネット等で性的な描写のある動画を見たことがある生徒がいる等、「性」に関する興味や理解についても実態の差が著しく大きい。

授業で「性」について扱うと、恥ずかしくて発言をためらう生徒も少なくない。しかし、「性」に興味がないわけではなく、知っていることや思ったことをどんなふうに表現すればいいのか、聞きたいことをどう質問すればいいのかなど、戸惑っている様子が見られる。

こうした生徒の実態を受け、本単元では、成長にともなう心の変化や男女の体の違いについて知ることで、自分自身の心と体の変化に気付き（自己理解）、自分のこととして考えられるよう促したいと考えた。そして、自分自身の心と体を大切にすることとともに、友達の心と体も大切に（他者理解）ということにも気づいてほしいと考え、「自分も大事 相手も大事」という単元を設定した。

実際の授業展開では、友だち同士で話し合うことや教師の体験談を聞くこと等を通して、目に見える体の変化だけでなく、目には見えない心の変化にも気づかせることを大切にしたい。具体的には、人によって感じ方が違うことや、心と体は密接に関係しあっているということ、プラスな感情でもマイナスな感情でも心で感じることは大事だということ等についても理解を促せるように配慮した。さらに、学んだ事柄を自他理解へとつなげ、お互いに尊重しあえるようになってほしいという願いに基づいて授業を実施した。

②指導形態の仮説

授業を行うとき、どのような学習集団を編制し運用するかということが、子どもたちの学習成果に強く影響する。そこで、男女共習か男女別習か、あるいは個別に指導するか等、指導内容に応じた集団編制のあり方を検討した。

本校の中学部では、普段の授業でも教科を縦割りグループで行ったり、遠足や宿泊などの行事では、クラスの枠を外して男女共習の4つのグループで活動したりするなどの取り

組みを継続してきた。こうした取り組みによって、普段から休憩時間に別のクラスに遊びに行くなど交流も多くみられている。

これまでの性教育では、男女別で学習することが多かったが、上記生徒の実態を踏まえて、本単元では、性別を超えてお互いを尊重し、思いやる気持ちをさらに育てていくために、男女共習で学び合う場を設定することにした。すなわち、男女共習で学習を始め、その後、男女別習での学習（質問事項を考える時間）を経て、再び男女共習で学び合う時間を設定することにした。

指導にあたっては、第1次では男女共習でプライベートゾーンについての学習から始めた。プライベートゾーンとは「水着で隠れる場所+口」で、「他人に見せても（口以外）触らせてもいけない、自分の体にある大切な場所」のことである。この内容を単元初めに設定した意図は、心や体の変化は抽象的な部分もあるため、目に見える形で性について考える機会を設けることが、学習のきっかけとしては効果的であると考えたからである。

続く第2次では、男女別の学習集団を用いた。ここでは、まず自分の体が二次性徴によってどのように変化するのかについて知る学習を行った。次に、その学習の中で抱いた疑問を異性へ質問という形でまとめ、ワークシートに記入させた。

そして単元終盤の第3、4次では、男女合同でお互いに学んだことを伝え合い、お互いの気持ちを考えていく活動を取り入れた。

③指導上の留意点

「性」に関する内容に触れるというだけで恥ずかしく思ったり抵抗を感じたりする生徒が多いため、性教育が大切であることや自分のためになるということを教師から一方的に伝えるだけでなく、教師が思春期のころ感じていたことを話したり、あらかじめ選択肢を用意したりする等、話しやすい雰囲気づくりを心がけた。

また、教師が生徒のつぶやきを聞いて書き取ったり、代弁したりする等の支援を行うことで自分の考えを表出しやすいように配慮した。

さらに、授業以外で担任等が思春期の心や体の変化について話をする時間を設け、それぞれの生徒がどのぐらい理解できているのか、どんなことを思い感じているのかを探ったり、生徒達の考え方を受けとめたりして、個別に支援を継続してきた。このように、授業以外においても「性」に関する内容について触れる機会を設定することによって、生徒が戸惑いながらも思ったことを恥ずかしがらずに伝えることができるようになってきたからである。

これらの考えに基づいて作成した単元計画と学習集団の編成を以下に示す。

4、実践の結果

第1次のプライベートゾーンの学習では、生徒の中には「口がプライベートゾーンに入るとは思わなかった」という意見を述べる生徒が何人かおり、水着で隠れていない場所もプライベートゾーンに入るという気づきがあった。

指導計画	集団編成	グループ数	単元名「自分も大事 相手も大事」
第1次	男女共習	2つ	プライベートゾーン
第2次	男女別習	3つ(男子2女子1)	みんなの体のことを知ろう(二次性徴)
第3次	男女共習	2つ	男女の違いを知ろう

第4次	男女共習	2つ	自分も大事	相手も大事
-----	------	----	-------	-------

第2次の男女別習では、男女の体の違いを知るために、授業の前半は、自分（同性）の体についての二次性徴を知る学習に取り組んだ。後半は異性の体について、男子は女子に、女子は男子に対して知りたいことを出し合った。

図2は、ある生徒が書き込んだ質問内容である。「思春期になったらイライラするようになりました。」と自身の心の変化を記述するとともに、「どんな性格の女（の子）を好きになるのかな。」と男子の立場から女子への見方を知りたいという思いが取り出された。子どもたちがこのような質問を書くことができたのは、男女別で質問事項を考えたことが影響したものと考えられる。

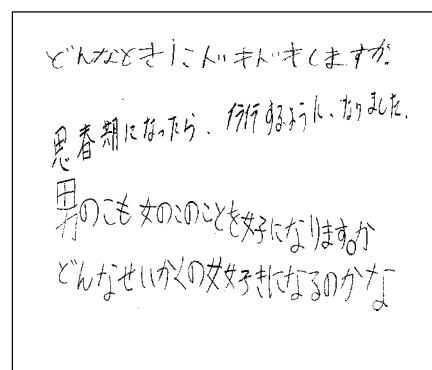


図2 生徒の質問内容

第3、4次では、前時に男女別習でお互いに学んだことを伝え合い、お互いの気持ちを考えていく活動を取り入れた。「好きなアイドルができた」「好きな人ができると話をするときに緊張する」など実際に本人から直接聞くことができた。また、質問として「好きな人ができたら恥ずかしくて話ができなくなったことはありますか?」「身長が一気に伸びると体が痛くなりますか?」などの質問が出された。これは、同性同士で話し合いながら質問内容を考え、それを記述させていたことによるものであろう。こうした質問に基づいての受け答えがスムーズにできたことで、授業後半の生徒の感想を述べる場面では、「初めて聞くことがあった」「心の変化は男子と同じだと思った。」など一人ひとりが感じたことを素直に述べ合うことへつながったものと考えられる。

5. まとめ

今回、中学部生徒を対象に男女共習を取り入れて実践を行ってきたことで、生徒の発言に変化がみられるようになってきた。例えば「〇〇くんは、強い女の人が好きなんやなあ」と自分とは違う考え方があることを感じた生徒がいた。また、男女共習で生理のことを学習した後は、これまで、「あの子なんでプールに入らないの?」と質問していた男子生徒が「女の人は大変やな」や「前に習ったな」と伝えに来るなど見学することを当然のように受け止めるようになった生徒もみられるようになった。

これらは、男女の違いを知ることでお互いを認められるようになってきたことを示す発言であり、人として個人の違いを知ることができたように考えられる。こうした生徒の変容は、男女共習・男女別習の指導形態を意図的に活用したことが影響したものと考える。すなわち、一方的に先生の話聞くよりも、友だちから直接気持ちや疑問に思っていることを聞くことができたことが子どもたちの心に直接響いたものとする。

今後も、一人一人がその人らしく生きているということを知るための一つの教材として引き続き実践していきたい。

文献

UNESCO 編 浅井春夫 良香織 田代美江子 渡辺大輔 訳 (2017) 国際セクシュアリティ教育ガイダンス—教育・福祉・医療・保健現場で生かすために 明石書店